

ほじろ ゑがひ きび、あは、ひゑ、米、
すりゑ、四分ゑよし

大ききすゞめに大ぶり、毛色すゞめにあかみあり、目の邊に黑白のすぢ引たり、よつてほじろといふか、さゑづりよし、片すゞ、もろすゞとて、さへづりに善悪あり、尤子がひ調法とす、もろすゞ音まれなり、あら鳥ふゆより春さきまでおほくいづる、す子は夏のはじめよりいづる、

みゑがひやあは、きび、
すりゑ、五分ゑよしまあは、きび、
すりゑ、五分ゑよしほあは、きび、
すりゑ、五分ゑよしじろ

大ききほじろにて、けいろうすく、ほじろの白きところうこんに黄いろなり、むねにくろき月のかたち有、大むね小むねとて、月がた大きなるをよしとす、さへづりよし、かひ鳥の上ぼんなり、ふゆいのこよりいづる、仍ていのこ鳥ともいふ、

〔百千鳥上〕畫眉鳥 餌がい、ハヤ五分ゑ、青味入、

大ききまひよ鳥のごとく、總身茶色に、頭のあたりこまかきふ有、總身黒き細筋、茶いろの内に有、總身光り有、髭足ともに茶色に黄味あり、囀高音にていさぎよく、おもしろきもの也、鳥かるく尾羽を遣ふて籠のうちよし、白き眉有、まことに繪書るがごとし、巢はなしかはる沙汰なし、

〔飼鳥必用中〕峩眉鳥

此鳥長崎江持渡りし鳥也、先年澤山持渡りし時、長崎にて甚下直故に、唐江持歸りたるよし、其以後不持渡、由吳越の境に峩眉山と云山有り、此山桂木多故に、論山となりて終に火を付焼たり、此山に居泊り候峩眉鳥にて、焼し故に鳥も不住、夫ゆへ不持渡と云、嘶をしたる人あり、是は往古の事、峩眉鳥は目の廻り目尻へ、見事に白く繪を書たるごとく、の府合ありし故に、畫眉鳥と名付たる也、何ぞ出生の山を名付るにはあらず、唐にては、鳥を料理に不仕よし、活鳥にて持行商賣するのよし、其内にも此鳥の類種々見得候との咄を聞しなり、何ぞ珍敷本朝にても秘藏の人も可有に、漸々嘶を聞しまで也、